第一部　フランツ・シューベルト（1797 - 1829）の歌曲

Lachen und Weinen　：笑ったり泣いたり

朝には気分よく楽しい気持ちで笑えるのに、夕べには悲しい気持ちになるのはなぜだろう。自分の心に尋ねてみなければなりません。

Heidenröslein　：野ばら

少年は荒れ野に一本の野ばらを見つけます。少年は美しさゆえに、その野ばらを手折ろうとします。野ばらは抗いますが、結局手折られてしまします。ばらよ、ばらよ、赤いばらよ。野中のばらよ。

Schäfersklagelied　：羊飼いの嘆きの歌

羊飼いの青年は、何とはなしに周囲に流される生活をしていました。ある時、彼の恋人は遠い国に行ってしまいました。羊飼いは悲しみに暮れます。

Die Forelle　：ます

私は小川のほとりでますが元気よく泳いでいるのを見ていました。そこへ漁師がやってくると澄んだ水を濁らせてあっという間にますを釣り上げてしまいました。

Du bist die Ruh　：君こそは憩い

君は私の憩いであり、憧れです。さあ、私のそばに来て心の中から苦しみを追い出し、この心を君の喜びで満たして下さい。私の眼の中を君の輝きだけで満たして下さい。

Gesänge des Harfners　：竪琴弾きの歌

竪琴弾きはゲーテの小説「ヴィルムヘルムマイスターの修行時代」中の登場人物です。この老人はかつて自分が心の底から深く愛した女性が実の妹であることを知り、幸福の絶頂から奈落の底に突き落されます。老人はそれを単なる偶然ではなく，神の意志による運命とみなし、神の恐ろしさを思い知らされ，呪いと罪の意識によって彼は半狂乱となり、孤独な放浪の人生をあてもなくさ迷うことになるのです。

1．　*Wer sich der Einsamkait ergibt　：孤独に身をゆだねるものは*

孤独に身を委ねる者は、ああ、まもなく独りになるのだ
誰もが生き　誰もが人を愛すのだが、彼を苦しみの中に放っておくのだ
そうだ、私を苦痛の中に放っておいてくれ、唯一度でも私が
真に孤独であることができたなら私は独りではないのだ。
恋する男が耳を済ませながら、彼女は独りかどうかと忍び歩く。
そのように昼も夜も孤独な私にこの苦しみが忍び来る。
孤独な私にこの痛みが忍び来る

ああ私がいつか墓の中で孤独になる時、ようやく苦しみは私を独りにさせるのだ

2．　*Wer nie sein Brot mit Tränen ass　：涙とともにパンを食べたことのない者は*
涙と共にパンを食べたことのない者は、
苦しみに満ちた夜ごとに、ベッドに座って泣いたことのない者は
あなた方を知らないのだ、天の力よ。
あなた方は我々を人生へと導き、惨めな者に罪を負わせ、
それから苦しみを与えるのだ。
全ての罪は地上において報いを受けるのだから。

3．*An die Türen will ich schleichen ：私は戸口に忍び寄る*
戸口に忍び寄っては静かに慎ましく立っていよう。
敬虔な手が糧を施したなら、また歩き続けよう。
誰もみな、私の姿を見れば自分が幸せであると感じ、
一粒の涙を流すだろうが、私は何故泣くのか分からないのだ。

第二部　イタリア歌曲とオペラ・アリア

Selve amiche　：親愛なる森よ　カルダーラ（1670 - 1736）
心親しき森は、わたしの心の忠実な宿です。恋する魂のためにしばしの安らぎを、その苦しみに与えて下さい。

Star vicino：愛する人の近くにいることは　ローザ（1615 -1673）
愛する人のそばにいることは、何よりの喜びです。愛する人から離れていることは何よりも苦しいことです。

Aprile：四月　トスティ（1846 – 1916）
春がふりまくこの香りを感じないのか。新しい音の響きが聞こえないのか。さあ四月だ、恋の季節だ。恋人よ花咲く野原に来たれ。

Tormento　：苦悩　トスティ
私が君の愛撫を思い出すとき、君はどこにいるのだろう。苦しみの中で君を呼ぶ時、いったい誰が答えるだろう。愛はそよ風のごとし。愛撫して通り過ぎて行く。

Ombra mai fu　：かつて木陰は（歌劇　セルセより）　ヘンデル（1685 – 1759）
私の愛するプラタナスよ。嵐も雷もその平和を乱さぬように。緑なす木陰の内で、かつてこれほど親しく、愛らしく、甘美なものはなかった。

Non piu andrai farfallone amoroso：もう飛ぶまいぞこの蝶々（フィガロの結婚より）

モーツァルト（1756 – 1791）

ケルビーノが伯爵の館の中で、伯爵夫人を初めとして多くの女性たちと親密になるのを怒った伯爵は、ケルビーノに軍隊に行くように命じます。フィガロは目配せでケルビーノを安心させつつ「軍隊へ行ったらこんなきれいな服装はできないぞ、大変な苦労をするんだぞ」と大げさに歌って聞かせます。

Ella gia mai m'amo：彼女は決して私を愛さないだろう（歌劇　ドン・カルロより）

ヴェルディ（1813 – 1901）

この曲はスペイン帝国黄金時代に君臨したフェリペⅡ世のアリアです。この国王は三度目の結婚の相手として政治的事情から、息子であるドン・カルロの婚約者であったフランスのエリザベッタと結婚します。国王はフランスから嫁いできたエリザベッタが自分の白髪を見たときの悲しげな顔が忘れられません。息子のドン・カルロはプロテスタントの勢力に協力し、フランドルの独立運動に加担します。このような悩みを抱え、国王は不眠症に陥ります。「エリザベッタは決して私を愛しはしない。神のように人の心が読めたらな」と歌います。

鈴木優（バリトン）

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。聖徳大学大学院音楽文化研究科博士課程修了。 2012 年 3 月、学位論文「シューベルトの歌曲におけるドッペルドミナント和音の用法」と「冬の旅」全曲演奏により博士号取得。 1982 年より 2 年間東京混声合唱団に在団。 1992 年夏より 2 年半にわたりアウクスブルクに遊学。帰国後はドイツ歌曲を中心とした演奏活動と合唱指揮および声楽の指導を行う。 1998 年には水戸芸術館「茨城の名手・名歌手たち」第 9 回に出演。 2002 年よりリサイタル・シリーズ「鈴木優の会」を行う。これまでに声楽を吉岡巌、橋本周子、高橋大海、平野忠彦、クラウス・オッカー、シャーロッテ・レーマンの各氏に師事。つくば古典音楽合唱団音楽監督、うしく音楽家協会会員、日本声楽発声学会会員。

門脇郁香里（ピアノ）

国立音楽大学教育音楽学科卒業。ピアノを田中はる子、原口歌子、バーバラ・マッケンジー、現在は鈴木ゆみの各氏に師事。声楽を田口孝子、瀬川武の各氏に師事。ビクター音楽産業（ビクターレコード）本社にて新譜案内書の製作に携わる。現在は合唱、声楽の伴奏者として活動している。